

ひろば 大代

平成 2,2,5

大代公民館

読書感想文全国コンクール

文部大臣賞奨励賞受賞!

おめでとう山下陽子さん

大代中学校一年生

全国約三百五十万点の応募作品の中から、見事金星を射止めたのは柿田自治会の山下陽子さん……去る一月二十四日、毎日新聞の一面記事を飾ったニュースに地元の換声が上りました。

ご家族や本人は勿論のこと、中学校では校長や担任の先生を始め一同、喜びと感激で一ぱい。

受賞式は二月三日、皇太子殿下をお迎えして東京会館で行われました。東京駅では東京石見高山会の祝福の出

文部大臣奨励賞
大田市立大代中1年
山下 陽子さん(13)



迎えもあつた様です。

※昨年の十一月には、全国花一ぱい運動コンクールで最優秀賞に輝いた下市田辺孝氏に続き、今また文部大臣賞を受賞、更には先般の大田市議会選挙に於て下市、市原仁郎氏が八年振り空白の議席を獲得致しました。

平成二年、なんと今年が良い事の続く当たり年か、話題が話題を呼び、町は喜びに湧いています。

「寝た子を起こすな

自然になくなる」について



山内昭二郎

同和問題は、このまま黙っておればお互いが更に知ることもなく立ち消えとなり、無くなるという自然解消論や、寝た子を起こすな論がまだまだ多いようです。

同和問題にかかわつての「寝た子」とはどういう状態をさすのでしょうかその代表的なものとして、三つのタイプがあるようです。これを簡単に紹介しながら、本当にそつとしておけば自然になくなるだろうか。考えてみたいと思います。

1. 「知らない」というタイプ

「知らないでいる人に、今更教える必要はない」という考えです。ところが、知らないと思つてゐるのは実は大変な錯覚で、大田市の意識調査によると、初めて知つた時期が、小・中学生時代合わせて五一%、高校生時代十一%で、成人式を迎えるまでに七一七%の人が知つています。成人後も合わせると、実に九五%の人が知つています。しかも八三%の人が家族、近所の人、学校の友達や職場の人に教つておりそれも、大人の無責任な偏見として教つていた事がうかがえます。これは島根県、全国それぞれの調査結果を見てもほぼ同じです。

2. 「忘れてゐるといふ」タイプ

「もう、たいていの人は忘れてしまつてゐる。なぜ、今更思い起こさせる必要があるのか。このままそつとしておけば、部落差別は自然になくなる。」という考えです。

忘れてゐるといふことは、かつてだれかから教つて知つていたといふことであり、同和問題が自分自身

の問題としてふりかかった時、必ず思い出すことになりました。寝た子はいつか起きるといふことです。その時、かつて、正しい同和教育を通して知っていたのではなく、間違つた知り方をしていたために、偏見として思い起こされたらどうなるのでしょうか。

3、「たぬき寝入り」というタイプ

このタイプは、ちゃんと知っており、忘れてもいません。けれども、あまり面倒なことにはかかわりたくないし、寝ている振りをしている方がよいと思つている。ところが、知人などが被差別部落の人と交際していると、「気をつけた方がいいよ」とか、親切心のもりで教えたり、注意したりするなど、部落差別を平気でやるタイプです。これは、差別をまき散らす危険性があります。

以上、同和教育にかかわつての「寝た子」の三つのタイプを紹介しました様に、そつとしておいては部落差別はなくならないのです。全く知らない人でも、何らかの機会に何らかの形で知るようになり、それが、いったん偏見

として染み着いたらなかなかとれませんが、ですから、偏見が染み着かないように、正しい同和教育をしておくことが大切です。

また、忘れている人には正しく目覚めてもらい、たぬき寝入りしている人には、同和教育を正しく理解してもらうために、そして「みんなの幸福」を共同の力で実現していくために、学校や家庭や地域での同和教育を是非実施しなければならぬと思ひます。

「差別と私たちの暮らし」

(吉田猪三已著) 引用

市議当選の喜び



大代町の皆さんのお陰で

下市 市原仁郎

『飯谷の皆さん。市原にろう只今帰つて参りました。最後まで何卒宜しくお願い致します。最後の勝利までどうか宜しくお願い致します。』

一月二十七日夜七時半前、ようやく我が愛する大代の地へ帰つて来た。山田、本郷、八反田と地域名を連呼し乍ら、懸命に涙が出そうになるのを押さえて叫ぶ。あちこちの高い家からは、

灯を回し乍ら無言の声援が飛ぶ。こちらにも懐中電灯をゆっくり回して応える。石清水八幡宮の前からは車から降りて一軒一軒を歩く。私と家内の二人で「お願いします。お願いします。」と声にもならない声で握手をして回る。橋本のガソリンスタンドの前で最後の集會。運動員の方からも「今日迄の強力な御支援に深く感謝します。斗いはまだ明日一日残っている。全員棄権をせずに市原にろうを当選させようではないか。」と最後の激励。暗い闇の中の劇的なフィナーレである。

二十一日の出陣式で私は「大代の未来を信ずる皆様方の想いがある限り、私は勝利を確信しています。」と申しましたが、まさしくその通り、正義が存在する事を立証したのであります。

婦人部、青年部を中心とする行動隊が全面に出た事。各自自治会の老若男女の心が完全に一つになった事、東京石見高山会を始め町外多くの方々の支援があった事等、市原の斗いではなく大代の町民の斗いであつた事が勝利の原因でした。

この力を何時迄も継続すべく、町民

の皆様と共に、皆様の声をよく聞き乍ら前へ進む事を誓います。

半年に亘る強力な御支援に対し心よりお礼申し上げます。本当に有難うございました。

市原仁郎氏の
市議当選を祝して



下市 藤田権現

この度、市原仁郎氏には大田市市会議員改選に当り、見事ご当選の栄を得られ、私共心からお慶び申し上げます。もとより私は市原氏の常日頃の誠実な御努力、その上清廉潔白で、物事を処理する情熱と行動力を高く評価しておりました。このような高成績をおさめられましたのも市原仁郎氏のご人徳のためものと私は今更ながら敬服し、これまで支持支援できましたことを心から光栄に存じています。

誠心誠意一生懸命でお世話なされたお方達、それをとりまく町民の皆様方の一致団結によるものと深く感謝感激しております。

一人は石垣、人は城、情は味方、仇は敵、真心込めて一生懸命やれば、お

天道様は必ず見ていて下さる。本当にその通りになりました。大代町民の良識が勝ったのです。

これから先どうぞ大田市政界に一大論陣を張られ、大田市の政治の大転換への起爆剤として、ご活躍下さいませ。また大代町のためにもご奮闘あらんことを心からお祈り申し上げます。

大代に希望の光

下谷 尾崎三枝子

日本の高度成長が進むにつれ大代は過疎の一途を辿る事になりました。大田市へ編入されて二十四年、地理的に市の西山間部に位置し、目立つ産業も観光もなく今日に至りました。

しかし都市化が進み、田舎の良さが再発見され始め故郷へ帰って老後を送りたいと言う声も聞く様になりました。六十才停年でもまだまだ仕事も出来、故郷の活性化にも可能な年令です。受け皿の大代を今ふん張って魅力ある故郷作りを手掛けていなければ成らない時、市原市議立候補の話が持ち上がり大代を愛する勇氣と実行力は町民の心を打ちました。

願みると八年の年月は大代町にとって長い長い空白でありました。告示と共に町民の心は決まっていたかの様な盛り上がりを感じました。何が何でも市原様を市会に送るべく町民が一丸となって、今度の勝利を勝ち取ったのです。言うまでもなく中心になってお世話下さった方々の御苦労と、取り巻く町民全員の結束があり、あの結果となって出た事は言うまでもありません。

開票の夜の満場に満ちた喜びの渦の中に私も一員として只々涙がこみあげて来ました。そしてこれが大代の底力だと思えました。この喜びを忘れずにこれから市原市議を先頭に大代、そして大田市の発展を祈りたいと思います。万才、万才、万才！

下萌や 舌戦こだま 大選挙
特望の 梅一輪や 我が郷に

3月少年健全育成指標

土の恵み、体で知ろう親子して
一日に一度は合わそう親子の目



全国読書感想文コンクール 文部大臣奨励賞

同 島根県最優秀賞 (県教育委員会賞)

手巾ハンカチ (芥川龍之介) を読んで一年 山下 陽子

わたしは、あまり自分の考えを表に出すほうではありません。たとえば、自分が何かひとつ意見や考えを持つているときでも、他の人が別の意見を発表したりすると、結局言わずじまいになってしまいます。それに、自分では内心いやなことでも、平気なふりをして「いいよ」と言ってしまうことが多いのです。だから自分の本心をだれにでも気軽に打ち明けることはありません。友達や他の人には何か話しくく感じるのです。それに、相談しても、その人が真剣に私のことを考えてくれるかが心配なのです。

そんな私は、この夏、芥川龍之介の『手巾』てんぎんを読んでも、とても考えさせられました。ある日、一人の婦人が主人公のもとへ、自分の息子が世話になったお礼を言いにやってきました。しかしその息子は一週間前に亡くなっていました。つまり、母親として最もつらく悲しい知らせを伝えるにこの婦人はやってきたのです。ところが驚いたことに、この婦人はその知らせを涙ひとつ見せず淡々と話しているのです。そこには愛する我が子を失った悲しみにただ泣き叫ぶだけ、というような「母親らしい」姿は全く見られません。主人公

は、乱れることなく平然と話しを続ける婦人の態度に内心驚きを隠せませんでした。私は、小さいときに父を亡くしました。初めのころは、家族みんなが落ち込んでいて、暗いムードが家の中にありまして、みんなさびしさを感じはしても、それをできるだけ表面に出さないように努力して家族で協力して分けしてやってきたのです。「つらい」とか「悲しい」とかいった文句を一つももらさずに、母は働きに出かけ、姉は料理をし、兄は新聞配達のアルバイトをしていました。たとえさびしくても、それを涙に表すようなことは、少なくとも人前では絶対できなかったのです。

それだから、主人公がベルリンに留学した時の話しの中に出てくる二人の子供の姿は私にはとてももうらやましく感じられました。陛下の死に対して、二人の子どもは大声で泣き叫び、自分の悲しい気持ちを体いっぱい表現していたのです。悲しいときに悲しいと言える姿、苦しいときに苦しいと言える姿は、私には何か別の世界の人のように感じられ



たのです。私には、悲しみをぐつとこらえて顔にはひとつも表そうともしない婦人の姿に共感はできても、ふたりの子供のように、自分の気持ちをそのまま表現することはまずできないな、と感じていました。

ところが、主人公は、悲しむ様子を見せない婦人の心の奥にしまわれた本当の気持ちを、意外なところに発見したので、婦人の手元の手巾を見てしまったのでした。それには、表面にこそ自分の感情を表そうとしない婦人の、亡き息子に対するなげき、悲しみのすべてが込められていたのです。しっかりと手巾をにぎりしめ、ふるえるその手元には、まさに母親の子供に對する愛情、そしてかくそうとしてもかくしきれない悲しみが表されていたのです。そうです。ひよつとしたら、私もこの婦人のように『手巾』を持っているのかもじれませんか。自分では、自分の気持ちを常におさえて生活しているつもりでも全然気がつかないところに、私の『手巾』は落ちているのかもしれない。今までまわりの人たちは私の気持ちをわかっていないんだ、と思っていた私でした。そして、苦しいことや悲しいことは表面に出さないようにして、ひたすら努力していくことが一番私らしい生き方なんだ、と書いていました。しかし、こうして考えてみると、私はいくらでも気がつかないところで、私の『手巾』をそつとにぎりしめ、時にはくやしそうにぐしゃぐしゃにし、

また時にはうれしそうにふりまわしていたのかもしれないのです。そして、実はそれに気づいていなかったのは私だけで、みんな本当は、私の本当の気持ちをしっかりと見つめてくれ、理解してくれたのかもしれないのです。そして、まわりの人もまた、見えないところで自分の『手巾』をにぎりしめているにちがひありません。父親の代わりに遠くに働きに出ても、文句ひとつ言わない母。他の同じ年ごろの友だちのだけれよりもたくさん手伝いをして疲れひとつ見せない兄弟たち。そして、ふだん何気なく生活していたり、あるいはしあわせそうに見える周囲のたくさんの人々まで、みんなみんな、心の底にしまった気持ちをどこかできさやかに表現していると思うのです。今も世の中には生きていく人と同じ枚数の『手巾』があちらこちらで見えかくれしているのではないのでしょうか。そして、そんな人たちの『手巾』を、できるだけ見つめてあげることこそ、人間としての本当の理解、そして本当のやさしさと言えるような気がしてなりません。

